

ウサミン星に移住したい

匿名希望のウサミン星人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウサミンカワイイよね？な気持ちが大爆発した結果生まれた産物。タグは多分その内増えます。

中々都合がつかない為にかなりノロノロしておりますが暖かい目で見守ってくださいませ。

.....

目次

34

時系列とかそーいうメンド、理屈諸々無
視するとーくべーっへーん

番外編(ばーんがーいへーん)！

ウサミン星建国(星)記念日！

1

ウサミン・エンカウンターっ！

ああ菜々さんかわいいよ菜々さん

9

だからウサミンは17歳つつてんだろ

いい加減にしろ ————— 23

荒ぶる眼(まなこ)でロックオン！クー

ルにワンコにステインガー(物理)！

時系列とかそーいうメンド、理屈諸々無視するとーく
べーつへーん

番外編(ばーんがーいへーん)！

ウサミン星建国

(星) 記念日！

俺は今、大変な危機に陥っている。

「ねえうづちゃん、どうすればいいと思う？」

「え、急にどうしたんですか？」

「ウサミンへの誕生日プレゼント!!」

「このままじゃウサミン星の住人を名乗れなくなるッ
!!!!!!

事の始まりは4月15日のプイッターのプイトだった。

『祝え！ウサミン生誕祭、その一月前であるッ！』

それを見た瞬間に。

「なっつ」

自分の失態に漸く^{ようやく}気付き、机に思い切り頭を打ち付けた。

俺は物事を決めるのが苦手な優柔不断な人間で、とりわけお土産などの誰かに贈るものをスパッと決められた事が片手で数える程しかなく、よく両親を困らせていた。

それ故に誕生日やら何やらを考える時間をどんなに短くとも2ヶ月は取っていたのだが、

「いやちよつと待つてジロさん」

「およ?どうしたのちゃんみお」

「て事は、え? ニュージエネとかあたしたちへの誕生日プレゼントとか2ヶ月も考えてたの!?!」

「いやいやいや、君らへのプレゼントだよ? 2ヶ月なんてそんな短いわけないじゃない」

「いや充分長いと思うけど!?!」

「て言つても精々半年くらいだけど」

「いや重い重い重い! 半年とか嬉しい通り越して重いんですけど!?!」

「わあ、ありがとうございますギン兄さん!」

「半年、これが、私との、差——!!」

「純粹すぎるしまむーはともかくしぶりん!? まともに受け入れちゃダメよ!?!」

ふむ、ちよつと余計な事を言つてしまったかもしれない。客観的に見たら半年つてやべえ。自分がされたら多分引いてる。ドン引きです。因みにジロさんはちゃんみおが付けたくれた俺のあだ名である。

「でも、プレゼントかあ。やっぱ無難にハンカチ？」

「一番最初にフェイスタルやらヘアバンドと一緒に贈った、ウサギ柄。因みにピンクのリボンも前回に選択済み」

「あ、じゃあ洋服とかどうかかな？」

「んー、それも前にフードにうさ耳ついてるパーカーをね。」

「じゃあ花束とか。お買い求めはぜひうちで」

「商売根性あるなあ、でも誕生日に花つて重くない？」

「花屋の娘としてその言い分には思うところはあるけど、確かにそうかもしれない」

「早速行き止まりかあ」

うーんと唸るニュージエネの三人娘とオツサン一人。

途中で取り敢えず送ったものを書き出して見ようという頼りがいのあるリーダーちゃんみおの意見に従ってノートに綴ってみたものの、凜ちゃん（本人了承済み）

の、

「プレゼントとして贈れるものは大体贈ってるね」

という一言でまたも振り出しに戻ってしまった。この時に一悶着あったのはまた別

の話。

そうしてしばらくして、うづちゃんがでも、と口を開いた。

「やっぱり私は、心のこもったプレゼントが貰えたら、それだけでとっても幸せです！」

「うづちゃん ツ!!」

「卯月」

「しまむうううう」

俺とちゃんみおは「ああうづちゃんマジウツキエル」と涙が止まらなくなり、凜ちゃんは何故か彼氏面してる。気持ちは分かる。

そうだ、プレゼントは『何を贈るか』じゃなくて『心をこめる事』が重要なんじゃないか。なんでそんな当たり前の事を忘れていたのだろう。

そうじゃないか、だから我らが島村家では『卯月の肩たたき券』が人気な訳で――

ん？

待てよ、これは使えるんじゃないか？ いや、いける！これならば！

「うづちゃんありがとう！大手柄だよ!!」
?

「うええええ!!あ、ありがとう」

「えっと、なんかよく分かんなかったけど、凄いじゃんしまむー!」

「流石だね、卯月」

「え、えええ」

J K 三人に冷蔵庫に入れていた名店のケーキをあげて、早速作業に取り掛かった。

——そして誕生日から数日——

「おはようございます安倍さん、ところでその格好は？」

「あ、Pさん！奇遇ですね！ナナは2、3日オフを頂いたので、秩父の方へ温泉宿に行つてこようかと！誕生日に旅行券を頂いたので！」

「そうでしたか、それならばぜひ楽しんできてください」

「はい。所でPさん」

「はい。なんでしようか」

「いや、こんなタイミングで聞くことじゃないんですけどお、ナナが（346に）来る時には必ずいますよね？ちゃんと休んでます？」

「様子、ですか。少々お待ちな」

「手帳で確認しないと休んだか分からないんですか!？」

「3ヶ月ずっと休んでない」

「え、っ、!?ダメですよPさん!」

因みにその日、有給届けを出された今西部長は色んな意味で驚いたとか何とか。皆様もお体を壊される前にしっかりとお休みになられてください。

お
誕
生
日
お
め
で
と
う
、
ウ
サ
ミ
ン
!!!!!!

ウサミン・エンカウンターっ！

ああ菜々さんかわいいよ菜々さん

《本日は、——航空をご利用いただき、真にありがとうございました。また、皆様と機上でお会いできることを、心からお待ち申し上げます》

日本語で放送されたソレと同様の内容の、複数の言語のアナウンスをBGMにラックから黒いキャリーバッグを下ろし、その取手を掴んで持ち上げつつ人の流れに従って歩を進める。

順調だ、と心の中でほくそ笑む。

あちらにはフライトの日程やら時間やらは伝えていない。これならいつもよりずつとゆつくり過ごせそうだ。

——そう思ってた俺を、ぶん殴りたい。

「徹頭さん！何か一言！」

「徹頭さん、今の心境をお聞かせ願えますでしょうか!？」

「今一番やりたい事は何ですか!？」

『テツトウ氏！何故タイタン・フット・エージェンシーからこの日本に移ったのですか!?!』

バシヤバシヤと嵐の如く浴びせられる一眼レフのフラッシュ。

逃がさんとはかりに周りを囲み、いつまでも付いてくる取材陣。よく見てみると
アメリカ側のも混ざっている。

誰だ余裕ぶって胸の中でドヤ顔しながら粋がってた奴は。俺か。

まあ、かと言って無視するのも余り良い選択ではないだろう。俺達芸能人てのは或る意味世間様のイメージで生きている様なものだ。

少なくとも無愛想キャラで通せる程器用な人間でもないのです、誰に対して答えてるか分かる程度に且つ適当に答えて突っ切るように無理矢理足を動かす。

しかし、それにしても人多過ぎない？こんな万年端役なむさ苦しい野郎なんぞに集る位ならアイドルやってるうちの従妹いとこや我らが女神の特集組んだ方がよっぽどか有意たか

義だろうに。というかもっと広めて。笑顔の素敵な人を皆で応援しようぜ！他のアイドルの方も美人さんだけけれど。

それはそれとして、いい加減間に合わなくなるんでそろそろ退いてくれませんかねえ？

数日前、とあるニュースが日本とアメリカという、世界を代表する先進国を驚かせた。

俳優『徹頭てつとう 鋼はがね』の事務所の移籍。

正確にはアメリカでは日本とは違い所属ではなく個人業としての俳優との契約という形をとっていたりなど日本と大分異なるのだが、長くなるので割愛する。

徹頭 鋼。

本名、『島村 銀次郎』。
しまむら ぎんじろう

齡13の時にベテラン顔負けのミスティアスな演技力にて鮮烈なデビューを果たし、16の頃には既に日本を代表する名優としての地位を確立していた。

更には18の時にアメリカの大手芸能事務所の本三指に入るとされる『タイタン・フット・エージェンシー』、通称『TFA』と契約を交わし、4年が経つ頃には既に名脇役としてその名をハリウッドに、全米に刻み込んだ鬼才である。

そんな男がアメリカに移り住み、正に順風満帆と言っても過言ではないのにも関わらず特に理由を語ることなく僅か10年と少して拠点を日本に戻し、こちらも大手の『美城プロダクション』（以下346）に所属するというのだ。寧ろ話題を呼ぶなという方が難しいだろう。

その大物が今何をしているのかと言えば。

（や、やつと着いたあ。．．．）

これからお世話になる事務所の前で見事にへばっていた。そしてそれと同時に、

(「デッ、ケえ!」)

完全にビビっていた。

この男、徹頭 鋼は実はかなりの小心者なのだ。

勿論非難であるため職業柄上精神力は一般的な小心者のソレよりかは多少は強いが、言つてしまえばその程度でしかない。

そして目の前に聳え立つのは、さながら天を掴まんとし伸ばされた巨人の腕が如きオフィスビル。

流石にマンハッタンにて遠目で見かけた摩天楼、とまではいかないが、それでもアメリカに移る前に一度だけ訪れた事のある『黒井プロダクション』(以下961)のモノを遥かに上回る規模である。

アメリカでも高層建築物は腐る程見て来たが、流石にここまでとなると中々お目にかかれないものだ。画像で何度も見て分かっていたからと言つておいそれと受け入れられる様な光景ではない。

さらに言えば、その周りに経つ他の建物やらがよりその異常スケールさを引き立てており、その目には今こうして呆然としている間にも少しづつ大きくなっている様に映っていた。

従つて心身共に腰が引けても致し方ない事なのだ。

しかし、それはここで足踏みしている言い訳にはならない。初日から遅刻という大失

態こそ犯してはいないものの、本来の念入りに調べたルートを本来の予定通りに行けたのであれば一時間程時間チキッの余裕イがあつたハズなのだ。

（大丈夫だ落ち着け俺！これから人様にご挨拶に伺うつてのにビクついてどうする!?!ここからが俺の——）

ジャイアントステップだあ！

そうして漸くトツツ一步を踏み出そうとした、正にその瞬間であつた。

「すみません」

「うおわひやひええい!?!」

思わず情けない声をあげ、その直後にギューン！と聞こえそうな勢いで顔を向けると顔を少し仰け反らせた大柄な男が立っていた。

敵つい顔をしておりそんなに驚かせてしまったか、と思つたがよくよく見てみればどうやらこの表情がデフォルトラしい。

「ああ、驚かせてしまつて申し訳ございません。てつきり我が社に何か御用がおり
と思ひ」

「へ？ いえいえこちらこそ見苦しい所をお見せして申し訳ありません、確かに伺ひし
ようとしていたんですけど御社の大きさに少し驚いてしてしまひ」

「そういう事でしたか、私も最初はそうでした。所でどちらまで行かれるのですか？ 宜
しければそこまでご案内致しましょうか？」

「え、いいんですか!? ありがとうございます！」

「いえ、お気になさらず。それと私は346プロの武内です、遅れてしまひ申し訳ござい
ません」

「名刺 あ、いえいえこちらこそすっかり忘れてました！ 自分はこういう者なのですが、
以後お見知り置きを は？」

「え？」

「え？」

互いに顔を強こわばらせながら、視線を相手の顔と名刺とを交互に見遣る。それも何度
も。

数多のシンデレラを導く従者と、シンデレラと血の繋がった演者の、少し気の抜けた

邂逅^{かいこう}であつた。

途中で出会つた武内さんのおかげで俳優部門のトコの責任者やアメリカで知り合つた美城さんにスムーズに挨拶しに行けた事で大分時間に余裕が出来た。その為にこうしてカフェスペースでゆつくりさせてもらっている。いつか絶対にお礼しないと。

それはそれとして、そろそろ来るはずだけど
..... レッスンが長引いてるのかな、真面目だからなああの子。

「ギン兄さーん！」

と色々考えていたら、2週間前に電話越しで聞いた俺の名を呼ぶ声が。

「やつほーうつちゃん、おひさ〜」

「もうギン兄さん！その呼び方はやめてって言ったのに〜！」

「H A H A H A！うっちゃんはいつまでたってもうっちゃんさ♪」

「これでももう高校生なんですよ!? 流星に恥ずかしいよ!」

「やー、ごめんごめん」

「わー！高いい。って言いながら持ち上げるのやめて!?!」

「いや待って。うづちゃん軽過ぎない？ちゃんとご飯食べてる？朝ごはんか昼ごはん抜いてたりしないよね？」

「食べてるよ！食べてるから下ろして!?!人前でやらないで下さいー!」

ワハハ、今でも高い高い好きなクセにあたふたしおってカワイイカワイイ。小さい頃はこれめっちゃ好きだったろうに。にしてもノリツツコミが上手くなったなあ。

というかいくらアイドルとはいえ本当に軽い。真面目に心配になる位には軽い。それとも最近の年頃の子は皆こんなモンなの？しっかりお仕事なさいな厚生労働省。

今空ここで可愛らしくぶんすかしているのは我が従妹にして世を明るく照らすアイドルシンデレラ、『島村卯月』である。

因みにこの子、346に所属する100人以上のアイドルの頂点である『シンデレラガール』に選ばれた事のある、正にスーパーアイドルと呼ぶに相応しい存在だったりす

る。真っ直ぐさと純粹さから一部のファンからは大天使ウヅキエルと呼ばれていたりする。大体あつてる。身内フィルターなけりや脇に手を引つ掛けるなんて事出来ないし。

「んじやうづちゃん、なんか食べる？奢るよ」

「わあ、やった！えーとそれじゃ」

「あんまり頼みすぎないでねー、今割と財布の中身ないし」

まあ足りなけりやATMから下ろせばいいけど。というか純粹單純すぎやしなにかシン
デレラさんや。

「そういえばギン兄さん」

ここを出た後の予定を確認していると、ふとうづちゃんが声を掛けてきた。

「ん？頼む物でも決まったの？」

「いやそうじゃなくて、なんでこのタイミングで戻ってきたの？」

「んー、理由はいくつかあるんだけどねー」

元々10年位したら帰ってくるつもりだった、てのもあるけど他にもいろいろある。

「ほら、お正月とかに年に1・2回は会ってたけどさ、なんだかんだうづちゃんのリブ見に行った事ないじゃん？向^{アメリカ}こうにいると中々都合がつかないってのが一つ」

「け、結構恥ずかしい事言うね。」

「まあ年齢的に年の離れた兄妹みたいに思ってるそこあるし。二つ目は、まあ自分試^ぶってヤツ」

「自分を試すためにアメリカに渡ったんじゃないやなかったっけ？」

キョトンとしながら首を傾げるうづちゃん。それも多分無意識。流石アイドルあざとカワイイな。

「あー、それよく間違えられるんだけどさ、ハリウッドに行ったのはあくまで修行だよ」

流石に年数で言えばまだまだまだひよっこな自分が通用すると思うほど自惚れちゃな

かったし。なんなら周りの人達がギガントやらヤマタノオロチのバケモンやらに見えてたまである。

ただ俺は相当に強欲な人間だったらしく、そういう格上の人間の見てる景色を少しでも早く見てみたくなってしまった。

んで、手っ取り早くめっちゃ積める方法ないかなーって思ってたらあつち^Tから^Fお誘いが来たからそれに乗って、で今に至る訳。

「まあつまりは、だ。当時の自分より遥かに上手^{うわて}な人達にどこまで近づけたか確かめるために戻って来たって訳」

「そうだったんだね。あれ、ていう事は場合によつては向こうにすぐ戻っちゃうかもしない、て事？」

「場合によつちや、だけどね。まあそうならない為に荒波に揉まれてきた訳だしねえ
精々慢心せずに頑張らせて頂きますよ」

「なるほど、凄いです、ギン兄さんらしいね！」

「いやいや、俺からしたらうづちゃんの方が凄いと思うよ？」

4年もオーディション落ち続けても諦めないとか俺じゃとてもムリムリ。半年もて

ば奇跡もいい所だ。

そして一生懸命積み上げてきた努力がこうして実を結んでいる。正にうづちゃんは、島村卯月はなるべくしてなったシンデレラなのだ。

てか少し真面目な話しちゃったから『あのアイドルのライブ』が見たいから』つていうのが一番の理由とかとても言えなくなっただんですけど。

「よし！私ティラミスにします！」

「へえ、ティラミスなんてあつたんだ」

「あれ、ギン兄さんメニユー見てなかったんだ」

「うづちゃんが来る前に何かを頼むのはちと申し訳なかったからね、お冷でなんとか粘らせて頂きました」

「その気遣いは嬉しいけどお店によつては冷やかしになっちゃうから程々にね。」

「勿論。あ、飲み物はどうする？」

「じゃあ、抹茶ラテで！」

「おっけ、それじゃあ俺はーつと、黒豆茶にしようかな」

「ギ、ギン兄さんおじいちゃんみたい」

・

「いーじゃん？上手いんだし」

うるへえ、最近の若い衆がオサレなだけなんじゃ。

まあそれはいいとして、頼む物が決まったので注文をしようとした所で――

「すみません、注文お願い、し、ま

.....

「はいはい、今行きまーす！」

「あ、菜々ちゃん！今シフトだったんですね！」

フリーズしてしまっただった。
女神に目がやられたのだった。

だからウサミンは17歳つってんだろいい加減にしろ

「はあつ、はあつ、じ、成仏するかと思った。」

「そう簡単に死んじやダメだよギン兄さん!？」

「え、イヤだって、振り返ったらいつの間にか最推しのアイドルがいるんだよ？」

普通に（嬉しすぎて）死ぬでしょ?」

「それでも本当に心臓とめないで下さい!？」

「いや俺にじやなくて心臓に言ってくれ」

「聞こえてますかギン兄さんの心臓さーん!」

「マジで声かけちゃったよこの娘!？」

ピユアかよカワイイなあ!アイドルが30近いオッサンの胸に顔近づけて叫んでるっていう絵面はアイドルとしてヒジョーにまずいけどピユアカワイイなあ!?!だからといって特にこれと言ったことする訳じゃないけど。

というか自分の推しが同じ事務所内とはいえ、まさかカフェでウェイトレスのバイト

してるとか誰が思うよ？

「あ、あのー、卯月ちゃん？その方は？」

とショートコントの様な何かを繰り広げていたが、すっかり蚊帳の外になっていたウサミンの声でうづちゃんと同時に我に返った。推しの前で何をしていたのだ俺は！

「あ、えつとですね、私の従兄です！」

「ああ、そうだったんですね！いつも卯月ちゃんにお世話になってますつ、346所属のウサミン星人こと安部菜々でーす！キャハツ☆」

「あ、だめだ、あたまがまったくうごかない。」

「あ、アレ？ひよつとしてスベつちやいました？」

「大丈夫ですよ菜々ちゃん！ギン兄さんは感極まつちやうと頭が真っ白になって動けなくなるんです！なんだってギン兄さんは菜々ちゃんの大ファンですから！」

「そうだったんですね！ナナ感激ですー！」

「ツ!? ツ!!?!」

さあ果たしてどうやって話しかけようかとガチガチな頭で必死に考えを巡らせていると、柔らかな温かな何かに手を包まれた。

なんと、ウサミンの両手である。ここで叫ばなかった俺を誰か褒めてくれ。

てかすっげえやらかいしめつちや温かいでもそのやらかさの中に長年の努力を感じ取れる硬さがあってそもそも何故ウサミンが手を握ってくれているのかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか（ry

「ん？この感じ、ひよつとしてナナの地下ア、ファーストライブの時にいた方ですか？」

「——え!? ひよつとしてツ・お、覚えていて下さったんですか？」

「といつてもついさつき思い出したんですけどね？ いやーそれにしても年・じゃなくて人気になるってのも困りますね〜！」

な、なんという事だ、ファンとしてこれ程嬉しい事があるか!? 思わず一瞬だけ大声で

叫んでしまったじゃないか！

確かにたまたま見かけた時に、心惹かれるいいライブでした、と伝えたばかりでそのままフラッと握手会に参加して、いざどうすればいいか分からなくなつて時に向こうから手を握つてくれてコロツとオトされた訳だが、まさか覚えててくれてたとは

「クツ」

「また死んじやつてますよ卯月ちゃん!？」

「ギン兄さああああああああああああああああああああああん!？」

...

「いやー、嵐のようでしたねー!」

「あはは、すみません」

普段は優しくしてしつかりした人なんですけど、とフオローを入れると菜々ちゃんは、大丈夫ですよ！と笑ってくれました。菜々ちゃんは同じ年なのに相変わらず凄いや。

その件のギン兄さんくたんはと言うと、復活してから時計を見るなり「あ、やば」と呟き5000円札を置いて風のように去ってしまった。お釣りはお小遣いにしていいと言ってくれたけれど、やっぱりママにお願いして銀行に預けて貰おう。

「それにしても5000円なんて大金をポンと置けるなんて、凄い方なんですわね。卯月ちゃんの従兄さん」

菜々ちゃんが虚ろな目でそう呟いた。そう言えば菜々ちゃんは一人暮らししてるんだっけ。学校とアイドル、その上での一人暮らしは大変だろうに、そう考えるとますます菜々ちゃんの凄さというのを感じる。

「まあ、ギン兄さんは誘われて海外で働いていたので」

「はえ、凄い方なんですわねえ。あれ、所でなんで従兄さんはここにいらっしやっただ

「んです?」

「ああ、ギン兄さんは今日からここで働くので、多分その関係じゃないでしょうか」

「ほほ、そうだしえ」

「あ」

菜々ちゃんの声を聞いて私が失態を犯したのに気づいた。慌てて両手で口を塞いだけれどあとの祭り。

別に私もギン兄さんも隠してる訳じゃないけどバレた時に、その、ちよつと大変なんだよね。最近の事務所はギン兄さんのニュースで引つ張りだこだし。

それにしても菜々ちゃん、鋭いです。

「ひよ、ひよつとして、卯月ちゃんの従兄さんて!」

「はい、多分菜々ちゃんの考えてる通りです」

「どっしええええええええ!」

菜々ちゃん驚きすぎですよ、と声をかけようとした瞬間。

グギッ!

と、おおよそ人体から聞こえてはいけない音が耳に届き。

「こ、腰が・ナナの腰があ」

「菜々ちやあああああああああああああああああああん?」

事務所に私の悲鳴が響いた。その事で偶然近くにいた凜ちゃんや未央ちゃんが慌て駆けつけ、近くにいた偉い人にうるさい、と叱られてしまった。

「いやー、やっぱ母国はいいもんだわ」

打ち合わせが終わって最初に思った事がこれだった。

だってアシさんとかマネさんとかわざわざ雇わなくても向こうから当ててくれるんだもの!

向こうじゃ元より売れる確証もないというのもあるけど何より生来の貧乏性が崇つて

ついで日本こっちに戻ってくるまで自分でスケジューリングとかしてたからね、おかげで心に余裕が生まれた。この国が恵まれてるってのはつきりわかんかね。ん？社畜大国しーらねっ。

なーんて一人心地ながら借りたレンタカーを走らせること大体20分。

？

「あゝ、やっぱ畳はいい文明〜」

絶賛契約したアパートの部屋で寝そべっております。

間取りは八畳半の1LDK、風呂・トイレ・エアコン完備、Wi-Fi完備。家賃は一月大体5万半。ここら辺としてはかなり破格の物件。なんでも二つ隣の部屋が訳ありだとかじゃないとか。正直覚えてない。畳の匂いでそれどころでもない。

「でもダンボールの荷物解かないとだしなー」

しかも冷蔵庫にも何も入ってないからこれからそれを買に行かなければならない。はつきり言つてめんどうくさいことこの上ない。

かと言つて明日から映画の撮影あるし、流星に何もしい訳にも行かない。ダルいけ

どね。

「ダルいからテキトーに魚焼きやいいや」

これは今日はブラ○ドボーン無理だなー、とか割とどーでもいい事考えながら、玄関へと足を進めた。

因みに夜更かしてギター引いてたら滅茶苦茶遅刻しそうになった。

その翌日。

「し、死ぬうっ！」

文字通り絶賛死にかけていた。

いや何なんアレ？確かに向こうにもムチャな監督いたけどね？流石に治安の良い日本でそういう事はないだろうとタカくくつちやいましたけど？でもなんでそういう人間にだけピンポイントで目をつけられちゃうかな俺は？

命綱無しで15mの崖での斬り合いのシーンとかマジの加減なし多対一の殴る蹴るとか時速80km/hで突っ込んでくる車の上転がったりとか頭おかしいでしょ？しつかり仕事してよねお巡りさん！

昨日書かされた契約書の『何があっても自己責任』ってそういう意味だったのね。誰だ毎回のパターンに気づかない学習能力が皆無なヤツは。俺か。にしても肋とか脛とか腕とかがクソ痛いんですけど。

いやもう動けないからな俺は。アレ以上の演技はほんと無理だからね！

「あ、あの〜徹頭さん」

「マナージャーさん」

「その、すみません、監督がリメイクだ、と」

「んー、生きて帰れるかなー」

「紙と筆と墨汁ならここに」

「遺書書かす気満々じゃないっすかヤダー」

俺は紳士だから「なんでそんなの持ってたんだ」とか聞かなかつた。

この後滅茶苦茶記憶飛んだ。

荒ぶる眼（まなこ）でロックオン!クールにワンコにスティンガー（物理）!

あの地獄の撮影からほぼ一ヶ月、俺こと島村銀次郎は346内のかふえくにて優雅にコービーブレイクを楽しんでいた。そこ、バカっぽいとか言うな。自覚してるから。

因みに敢えて菜々ちゃんがいらない事を確認した上で、だ。
なんで菜々ちゃんを避けたか、だって? ふふふ、決まってるだろう?

緊張と興奮でそれどころじゃなくなるからだよ言わせんな恥ずかしい。はいキミ、拗らせてるとか言わないの。

まあそんな事はどうでもいい。何故ならば――

（さーつきからずつと視線が痛い）

後ろから刺さってくるソレを『メルヘンデビューー!』とか『メルヘン∞メタモルフオー

「ぜー!」とか『碧いうさぎ』など諸々聴いて何とかやり過ごしていたが、流石に限度つてものがある。そろそろ紙耐久の胃袋に大穴あきそうなんでやめろください。

「今どきCDプレイヤーつて化せk・k・ロックですね!」

「聞こえてんぞだりーな嬢」

会って早々に失礼なヤツめ。風情があると言いなさい! 悪気がないから許す。でも次はダメよ?

それにいいじゃんかCDプレイヤー、音に温かみあるし電池変えれば充電みたく時間かかることもないし。

目の前にいるだりーな嬢こと多田李衣菜。彼女もまた346のアイドル部門に所属するアイドルである。

かつてロックを題材にした映画に出たことがあり、それで話しかけられたのだろうが、自分なりのロックをにわかに語ってみたり、彼女なりの「ロック」を追い求める姿は嫌いじゃないしむしろ好ましい、という事を伝えたら妙に懐かれてしまった。

いや最推しでは無いとはいえこんなかわいい子に慕われるのは嬉しくはあるのだが、『JK (リアル17歳) に懐かれるオジさん (29)』つて凄く犯罪臭が凄い。特にやま

しい事してる訳じゃないのに周りの視線がすつごく気になってしまふものなのだ。だからねいつも思う、『片桐さんその手錠を収めてくれると嬉しいな』って。

かと言って前に一度やんわりと距離感近すぎるよって言ったら目に見えてシユンとしちやったし。やめろよオジさんそういうのに弱いんだよチクショーめ!

「あ、そうだ鋼さん、ちよつと鋼さんのバッグの中探つていい?」

「え、今は構わないけど急にどーしたん?」

まあ今は通帳とか取られて困るものは入ってないから別にいいけど。そもそもこない娘がそんな事する訳ないけど。何?事務所内でバッグ漁られるような事でも起きたの?え、何それ知らない怖い。

「うっわ、それにしても難しそうな本とか菜々ちゃんのCDばつかじゃん、あ、でも他の人のCDもあるなあ、鋼さん意外と音楽好き?あ!私のもある!やったあ!

てゆーかほとんど本とCDじゃん!重くないんですか?」

「いや別にそんなでもないけど、」
「ところで何を探してんのだりーな嬢」

「いや、男の人って常にエッチな持ち歩いてるって聞いた事あるから」

「いやねーよ!? 飯に持ってたとしてもこんな所に持ち込むか!」

え、何、バグ漁られたのそーいうこと!? てか俺らの頃の高校時代ですらそんな奴はクラスに4、5人は居たな。いや今思ってたけど多いな!?

「でもさ、飯に見つけたとしてソレをどーするつもりだったのさ、だりーな嬢」

「え? ん〜」

さては何も考えてなかったなこやつめ。

よし、少しからかってやるか。

「あー、わかったぞだりーなじよーめー、さてはそういうのにきよーみがあるんだろう、このおすけべめー」(棒読み)

「な!? は、ええ!? いや、違う違う違う違う、そーう・じゃ・ないんですつて! ただその、なんというか」

「んー? ひつしになつちやつてーこのこのー、ますますあやしーぞー」(棒よ (ry

「あ、いや、ちつがうちつがう、そうじゃないんですー!」

「もー、だりーな嬢のえつちーンツフフ」

「~~~~~!からかいましたね鋼さん!」

違うんです、君の否定の仕方が鈴木雅〇の某曲の歌詞に似てたから笑ってただけであつて別にからかつてた訳じゃないんです（すつとぼけ）。

それに不用意にそういうこと調べる君が悪いんだで（しれつ）。

そう言えば最近の中高生つて木登りしたりすると場合によつちや捕まるんだっけ。モラルがきちんとしてきたというか過剰反応しすぎというか。

むしろ男なら木登りくらいやつて見せろつて感じだったからなあ、と思うと時代の流れを感じる。

なんて風に時の流れる速さに若干打ちひしがれ心を老けさせていると、だりーな嬢が
そういうえば、と話しかけてきた。

「鋼さんと卯月つて結構仲良いですよね? 噂にもなるくらいですし」

「噂? ああ、高い高いの事か」

「そう! それです!」

どうでもいい話だが一回パソコンでメールを送る時に『高い高い』と打とうとしたら『他界他界』と変換されたことがあるのはここだけの余談である。いやなんだよ他界他

界って。需要があつたのか俺の事が嫌いだったのかは知らない。ただ怖かつたという事は確かだ。

「そこで聞きたいんですけど、ぶっちゃけ卯月とどういう関係なんでひいッ!？」
「え、今度はどうしただりーなじょ うおっ」

だりーな嬢が急に顔を青くして座席の奥に逃げ出したものだから黒い触覚Gツイさんでも出たのかと思つたが、視線を辿つた瞬間に納得した。してしまった。

「何やつてんの渋谷さん」

さつきまで後ろから視線を刺してきていたと思つたらいつの間そこにそへ移動したのか、その問いかけにも答えず、ただただ机の端からひよっこり顔を出してウル〇オラ宜しくなんの感情もこもつてない目で睨み付けてくる。

あまりそんな目で見るなよ、怖いだろ。

「李衣菜、代わりに私が聞いてあげようか？」

「え、えと、その、」

「聞いてあげようか？」

「ハイどーぞよろしくお願いしますうっ!!」

「ん、ありがとう李衣菜」

ああだりーな嬢、しぶりんのあまりの迫力に完全に縮こまってやがる。
よく泣かなかった、偉いぞ
しっかりしろよ年上だろ？

まあ主にコレプレッシャーかけられてるの俺なわけだけど。胃どころか十二指腸ブレイクしそ

う。

「」

「す、凄い、あんな顔向けられて尚平然と」すごいロック」」

「」

違うんですだりーな嬢、表情筋がガチガチなだけなんです、だからそんな
ロックじゃない目を向けなくて心まで痛い!!

「それで？プロデューサーとも仲良いみたいだし、じつさいどういう関係なの？」
「んー、どうと聞かれても、ねえ。」

正直自分が生きてられるか不安だけど、別に疚やましいことは無いし、下手に誤魔化すよりはかはマシか。

「ただの親族よ、従いとこ兄妹」

暫しばしの沈黙の後、彼女らから一言。

「え？」

「まあこの反応は仕方ないだろう。自分で言うのもなんだが、仲のいい友人の従兄妹に有名人とかいたら俺でもそうなる。」

「え？ちよつと待つて下さい、私卯月からそんな事一言も聞いた事ないですよ!？」

「.....」

「そりやあそうとも、あの娘、『誰かの名前じゃなくて自分の力でアイドルを勝ち取った
い!』って俺の名前を頑かたくなに出さなかつたらしいし」

「卯月・ロックじやん!」

「.....」

「ふふん、だろ? うづちゃんは特別打たれ強い訳じやないし才能がある訳でもないけど、
壁を乗り越えた後が凄いからね、鼻肩目抜きで」

「少なくともうづちゃんが自分の事で慢心してるとこなんて見た事ないし、そういう話
も聞いたことがない。え、俺の時? すぐ褒められたくらいで調子に乗るハナタレ小僧
だったよ。」

「.....」

「おーい渋谷さん? さつきから黙だんまりでどうしたのー?」

「凜ちゃん、きつと鋼さんが卯月の親戚おって事がよっぽど驚きだったん——」

「つまり未来の義理おの従兄妹いって事だよね」

「ダメだこのオオカミ早く何とかしないと」

この後めちやくちや手を尽くしてだりーな嬢にも手伝ってもらったけど訂正出来なかつた。

あと正直「Pは旦那、卯月は嫁、乃々は娘」なんて格言聞きたくなかつた。欲張りはいかんよ。

そんな一幕からおおよそ五時間後。

「あゝ、死ぬ」

「死ぬってんな大袈裟な」

産まれたての子鹿の様に震える足にムチ打ちながら、マネさんと次の打ち合わせをしながら駅の方へ歩いていった。

「俺ダメなんですよ、人前で話したりそこから更に持つていくのとか」

「芸能人として致命的すぎませんか？そんなんだから安部菜々さんともマトモに会話できないんですよこのコミュ障エリート」

「コミュ障『で』エリートなのかコミュ障『の』エリートなのか分からないんですけど」「両方に決まってるじゃないすか」

「辛いアラサー辛い」

「この人なあ、凄く優秀だし気はきくしでいい人なんだけどなあ、すつごく口悪くて辛辣なんだよなあ。オジサンNA☆KI☆SO！」

「あ、カミさんに粉ミルクとオムツ買って来いて言われるんで、ここで失礼しますね」「家族、大事にしてあげて下さいね。んじゃ」

「未だ独身のアラサーに言われなくても分かっていますから。それじゃあ」「一言一言にトゲと悪意を感じる」

「この口の悪さがなければもつと上上がるだろうになあ、という言葉を飲み込みながら、互いに手をヒラヒラ振って別れる。」

さあて、つかの間の現実逃避はここまでとして。そろそろ次の仕事について考えなければ。

『仮タイトル：スパイフロッグ』

内容を簡単に言えば

『ワイヤーを使って360°飛び回る立体機動ガンアクション』

つまりそこら中に張られたワイヤーを使ってそれはワールドトリップの○閑遊真の如くビュンビュン飛び回れと。

「バカじゃねーの？」

アレか、日本のアクション映画界にもマトモな人間がいなくなったのか。前回の作品といいぶつ飛びすぎだろう。キャスト見る限り素人が殆どだし殺気しか感じない。仕事しろ司法。

.....
もういいや、考えるのやめた。

.....
 (.....) って出来たら、苦勞しないんだけどなあ)

まあこちとら仮にも社会人な訳で、同年代と比べて経験だけなら割とベテランなので嫌だ嫌だでは済ましたくないというプライドもある。

我ながら面倒臭い。面倒な男とか需要ないんですけどね。

というか別にアクション専門で訳じやないんだけど。最近体の節々が重くなってきたから勘弁して欲しいんだけど。

というかそもそもその話、まだ今の鬼畜シオン映画の撮影クランクアップしてないのに無理やり振じ込むとか（俳優課の先輩談）おかしいだろ。「これが出来るのが俺くらいしか居ないから」じゃねーだろ、そこをなんとかするのが監督とかの仕事じゃねえのか。

まあこんな所で愚痴垂れたって意味は無い。幸いこちらの映画を撮り始める時期は先に参加してた作品のアクションの撮影が終わる頃らしいし、行き来しながら暴れなくて済むだけマシだろう。

あれ、ひよつとしてもう社畜染化まっしてる？

等と一人で勝手に落ち込んだり戦慄を覚えていた時だった。

「おーい、鋼さーん!!」

「ひよえあ!?!」

アイエエエ!?!ウサ||ミン!?!ウサミンナンデ!?!

ぷりぷりして楽しそうに話すウサミン本当に愛くるしかったです。眼福眼福。